

中国人工エリートは

日本、日本人をどう見ているか

ジャーナリスト 中島 恵

私が中国人エリートに着目し始めたのは、2009年にあるニュースを目にしましたことからです。それは在日中国人の数

が在日韓国・朝鮮人を上回って、最多の在日外国人になったというものでした。日々の暮らしの中で、コンビニや居酒屋など身近なところに急速に中国人が増えたという現象を実感するうちに、彼らについてじっくり取材し、何かを書いてみたいと思ったのが、そもそものきっかけでした。

その取材をもとに、2012年に『中国人エリートは日本人をこう見る』、2013年に『中国人の誤解 日本人の誤解』（ともに日本経済新聞出版社刊）を執筆・出版しました。

中国に「全体の意見」はない

中国人学生の話に進む前に、まず中国

の若者とはどういう人々か、についてご紹介しましょう。中国の若者は中国の改革・開放（1979年）後に生まれた、現在35歳以下の世代です。中国語で「80后」（バーリンホー＝80年代生まれ）、「90后」（ジウリンホー＝90年代生まれ）と呼ばれるジェネレーションを指します。

彼らは人口13億4000万人の中国で、3億8000万人（3億9000万人いるといわれており、中国の中心となっている世代です。1979年末から始まつた一人っ子政策により、基本的には一人っ子が多く、自由奔放で現実的、権利意識

が強いといわれています。都市部では、生まれたときから物質的に恵まれて育った人々が多く、日本の若者と共通するところも多いといえます。

私はそんな中国の若者、中でも大学教育を受けたエリート層で、日本や欧米に関心の高い人々に的を絞って取材を開始しました。中国の人口は日本の10倍、面積は25倍もあり、中国は日本と違つて多民族国家です。中国の都市部から内陸部まで、幅広い層をいくら取材しても、「全体の意見」は出できません。地域ごと、年齢ごとの特性もまったく違う巨大な国家で、日本人が好むような「平均値」を日本人的価値観で切り取ることはできません。

それよりも、グローバル化が進行して



いる現在、日本人など外国人と接点を持つ人々、10年後、20年後に中国社会の中核となつて国家をリードしていくような人材に、日本についての考え方や意見を問うてみると意味があると思いまし
た。

現在、日本にいる中国人留学生は2010年の法務省の統計で約13万4000人、第2位の韓国人（約2万7000人）を大きく引き離しています。全外国人登録者数（約213万人）の中でも中国人は約68万人と日本で最多の外国人となっています。中国人が増えた理由のひとつは中国自身の経済発展であり、グローバル化が挙げられるでしょう。富裕層でなくとも、子どもを海外に留学させる余裕ができたことがあります。

最も人気のある国はアメリカで、現在約15万人が留学していますが、次に人気があるのは日本です。彼らはどうして日本を目指すのでしょうか。経済成長期ならともかく、「失われた20年」ともいわれ、閉塞感が漂う日本を、彼らはなぜ目指したのか。その理由を知りたいと思い、取材して歩きました。

留学生たちに話を聞いてみると、「日本をここまで経済成長させた原動力を知りたい」や「中国を飛び出して自分の世

界を広げたり、自立して生活したい」といった声が聞かれました。欧米に行くのは多額の費用がかかりますが、日本であればアルバイトも多く、文化的に近いので生活しやすいとも話していました。経済が低迷しても、日本にはまだ学ぶべきところがたくさんあると考えている留学生が多かったのが印象的でした。

驚いたのは「GDP世界第2位のバカ神話」という話が飛び出してきたときでした。2010年、中国はGDPで日本を追い越しましたが、中国人はこのことについてこんなふうに話していました。

「日本では大ニュースになりましたが、1人当たりのGDPで見れば、中国はまだ日本の足元にも及びません。中国は伸び盛りだけれど、まだ真のイノベーションや開発はない。第2位になったというのはバカな神話です。順位は抜いても、中国では本当に豊かな生活はまだ望めないのが実情です」

こうした鋭い意見に私は驚かされ、し
だいに留学生だけでなく、中国各地に住む若者にも目を向けるようになりました。

見た日本のアニメに関して専門的に勉強したくなり、都内の大学院に進学。いちばんのお気に入りは友情や絆を描いた『ワンピース』だといいます。

「中国のアニメは無理やり道徳心を教え込もうとするわざとらしいシーンが多いのですが、日本のアニメは中国アニメのようなお説教臭さがないのがいいし、大人も楽しめますね。あくまでもストー

オタクのための専門ウェブサイトもあるほど大人気です。コスプレも流行っています。これらはすべて日本のサブカルチャーの影響を受けているものです。

背景には、彼らが子どもの頃、つまり1990年代後半から2000年代にかけて、日本のアニメやマンガが中国で大量に出回ったことが関係しています。代表的なテレビアニメだけ挙げても、『スマッシュダンク』『一休さん』『ドラえもん』『聖闘士星矢』『ドラゴンボール』『NARUTO』『ワンピース』などがあります。湖南省出身で、都内の大学院で学んでいた胡さん（26歳）は、子どもの頃に見ていた『一休さん』に憧れて来日。胡さんは東京都内のお寺に修行僧として入ってしまった珍しい経験を持っていました。

北京出身の陳さん（22歳）は幼い頃に見た日本のアニメに関して専門的に勉強したくなり、都内の大学院に進学。いちばんのお気に入りは友情や絆を描いた『ワンピース』だといいます。



南京での同人ショー

リーが先にあって、その中で自然に人としての生き方を教えてくれる。コンテンツの質が高いですね」と陳さんは語っていました。日本ではオタクという言葉には暗さや特殊さがあるように感じられますが、中国ではオタクは断然よい言葉として使われていることが多いようです。

今年3月、私は南京で行われている同人イベントの取材に行ってきました。そこで出合ったのは、中国や台湾、香港などの若者の間で大流行中の「艦これ」で



コスプレの若者

した。「艦これ」とは「艦これくしょん」の略で、旧日本帝国海軍の艦船を、アニメの美少女に擬人化したゲームのことです。戦争を彷彿とさせるものですが、これが現地で大人気であると聞き、私は非常に驚きました。

南京のイベントに参加していた若者は、日本には一度も来たことがない大学生でした。話を聞いてみると「いいものはいい。題材は関係ないです。とくに中国にはまったく存在しないものに憧れを感じます」という屈託のない答えが返ってきました。中には公然と「日本のこと大好きです」と発言する若者もいます。こうした現状を見るにつけ、私は日本人が想像する以上に、若者の間では日中間の暗い歴史に対する抵抗や固定概念がこんなにもなくなってきているのか、と痛感することになりました。

しかし、これまで日本での報道では、中国の若者は愛国教育（正式には「爱国主义教育」）を受けて育つており、その影響で比較的反日意識が強い世代、だといわれてきました。実際のところはどうなのでしょうか。

愛国教育＝反日教育ではない

中国が愛国教育を強化したのは1993年ごろ、江沢民総書記の時代といわれています。1989年の天安門事件以後、その再発を防ぎ、バラバラになった国家をひとつにまとめるために強化されたといわれています。具体的には、学校教育の中に「愛国教育」という科目があるわけではなく、授業全体の中で、愛国教育という方針のもとで指導していくということであり、主に政治や歴史の授業の中で行われています。また、社会科見学の一環として全国にある愛国主義教育基地も訪れます。

愛国主義教育基地とは、戦争や中国共産党に関連した資料保存や展示を行う博物館などの施設で、たとえば「南京大虐殺記念館」や共産党第1回大会が開かれた上海の「中共一大会址」、北京郊外の盧溝橋にある「抗日戦争記念館」などの

ことをいいます。中国の学生たちは、中学校高校時代にこうした博物館などを見学したり、抗日映画、抗日ドラマなどを見たりしますが、若者たちによると、地域や学校、教師によって指導はバラバラで貫したものは存在しない、それほど愛国教育の影響は受けていない、とのことでした。

上海の大学に通うある学生は「日本人によく誤解されるのは、爱国教育＝反日教育といわれることです。爱国教育では、特定の国を非難することよりも、中国共产党の贊美のほうに重点が置かれています。苦難の戦争を乗り越えて、現在の中華人民共和国ができました。したがって、今の私たちがあるのはすべて共产党のおかげ、というところが結論なのです。ですから、抗日、反日だけがすべてではないのです」と強調していました。このように、若者の中には、爱国教育は受けていても、前述したように、日本への関心が高く、憧れの気持ちを持っている人々が大勢います。

しかし、若者の中には現状に強い不満を持つ人々もいることは事実です。エリートの若者といつても、実態は一様ではなく、さまざまな人がいます。そこには中國が抱える最大の問題である戸籍問題も

中国の戸籍制度は日本のように一つではなく、農業戸籍（農村戸籍）と非農業戸籍（都市戸籍）に分けられています。1958年に毛沢東によって導入された制度で、主に農業戸籍が6割、非農業戸籍が4割といわれています。社会保障や福祉、教育、医療などは戸籍所在地で受けることが基本となっており、農村から都会に出て勉強や仕事をしようと思うと、多くの不平等が生まれますが、若者にとって最も切実なのは大学入試制度です。

中国の大学入試制度は極めて複雑で、

関係しています。

中国の戸籍制度は日本のように一つではなく、農業戸籍（農村戸籍）と非農業戸籍（都市戸籍）に分けられています。1958年に毛沢東によって導入された

満を持つ若者が中心でした。

日本の青空や空氣に感動

日本に来た若者は日本のことはどう感じているのでしょうか。来日する若者は比較的恵まれた層であり、アニメなどに触発される人が多いこともあって、全体的に非常に好感を抱いているようです。とくに、多くの若者が最も感動するのがきれいで清潔なトイレ。2011年当時、来日した中国人に話を聞くと、当時ヒッ



抗日ドラマの1シーン

地区ごとに合格者数を決め、合格基準を設定する仕組みになっています。各地区の人数割り当ての詳細は明らかにされておらず、また年度によって変更もあるため一概にはいえませんが、大学が集中する北京や上海などの大都市の戸籍を持つ若者が優遇され、経済水準の低い農村の若者は不利とされています。農村の学生に対する合格点数は都市の学生のそれよりも高く設定されているという矛盾が生じているのです。就職も同様で、農村出身者は都会で仕事を見つけるのが困難です。こうした構造的不平等により、農村の若者は社会に強い不満を抱いていることは確かです。2012年9月の反日デモに参加したのは、このように社会に不満を持つ若者が中心でした。



南京大虐殺記念館に並ぶ人々

トしていた『トイレの神様』を例に挙げて、目を輝かせながらトイレの話をする若者が太勢いました。ある若者は「中国語では『洗手間的神明』（トイレの神様）とタイトルと歌詞をつけ、インターねつト上で話題になりました。この歌詞に多くの中国人が感動しました」と話していました。

「日本に行く前、自分は日本に対するある程度の知識を持っていると思っていました。でも、実際にこの目で見た日本は予想していたのと少し違っていました。日本は経済的にはとても発展しているのに、日本人は自然を尊重し、万物に神様が宿っていると感じています。自分たちの信仰をしっかりと持つてることに驚きました」

その女性は、北京の有名な商業ビルの建築家も中国人ではなく日本人の隈研吾であり、日本の村上春樹の本も中国でよく読まれていて、「彼らには日本人的なカラー、スタンスがある。それを貫いて世界で活躍しています。そうした日本人的な雰囲気を持つていて、それがすばらしいと感じました」と語っていました。

そのほかにも、日本人が日頃意識していない、おいしい水や空気、青空に感動する人も大勢います。中国と比べて、日本のフェアで平等な社会制度に感心する人もいました。こうした話を本に書いたところ、多くの読者から大きな反響をいただきました。日本人にとっては「当たり前のこと」が中国では当たり前ではない、手に入りがたいものであることや、

日本のインフラや生活水準の高さ、治安の良さなどについて、どれだけ得難いものであるのかを逆に中国人から教えられた、という感想もありました。

日本人については、よい印象とあまりよくない印象の両方が混ざっているようです。よい印象といえば、几帳面で眞面目、礼儀正しいという点が挙がります。「以前は中国を侵略した悪い国」というイメージも確かにありました。ドラマなどを見た上で、来日して生身の日本人と触れあってみると、印象はだんだんと変わってきました。日本人は戦後の廃墟から大変な努力をして立ち上がり、優れた自動車や電気製品を開発した技術立国ですね。礼儀正しくて、何でもきちんとやる民族だと思います」といった若者もいました。

ですが、「恥ずかしがり屋過ぎる」「自分の意見を言わない」「会議が長すぎる」「決断力やリーダーシップがない」というネガティブな声もありました。ある留学生の声です。

「大学の集まりなどで感じるのは、日本人は会議がすごく好きで、何時間も話し合うけれど、なかなか結果が出ないとのことです。以前、ゼミの授業中に旅行について会議をしたんですけど、長引

いてしまい、結局、研究発表をする時間がなくなってしまったんですね。日本では自分の意見をはっきりという人が少なくて、リーダーもなかなか決定できないよう思います」

「デモに参加したのは不満を持つ層」

歴史認識や領土問題など、日中間の懸案となっている問題についてはどう見ているのでしょうか。ちょうど私が中国人エリートのテーマで取材を開始したあと、2010年9月に中国漁船衝突事件が、そして2012年9月に反日デモが起きました。

反日デモの際、私は数人にインタビューしてみました。30歳になる男性は私に強い口調でこう語りかけました。

「石原さん（当時の東京都知事）のあの発言（ワシントンで東京都による島の購入計画を発表）がなかったら、日本政府があんまり慌てて島を買うことはなかったでしょう。もしかしたら、日本は肃々と実行支配ができ、中国人をこんなに怒らせることはなかつたかもしれません。だって、多くの中国人はあの島について、こんなに多くの報道を目にすることもなかつたはずですから。結局、東京都が買

うにしても、国が買うにしても、石原さんの腹は痛まなかつた。この一件の最大の勝者は石原さんだといえるでしょう」

別の男性はこう話していました。

「日本は中国と1対1で真正面から向かい合い過ぎます。中国は国境を接している国がいくつもあり、ひとつがすぐに解決できなくとも、複眼的に見て判断しています。しかし、日本は対中国という視座にしか立てず、あまりにも小さいことにこだわり過ぎる。公式的には領土問題は存在しないといいつつも、領土問題を重視し過ぎて、がんじがらめになつてゐるように見えます」



2012年9月の反日デモ

実際、デモに参加した人々の多くは、前述したように、社会に不満を持つ若者が中心でした。私が取材した上海の大学生は、デモに参加する若者について、こんな分析をしていました。

「日本は中国人にとって『爆薬を積んだバケツ』なのです。反日デモをする人々も日本のアニメやドラマを見て育っていますが、生身の日本人を見たことはほとんどなく、しゃべったこともないから親近感を持てない。海外に留学することはおろか、職もなく、金銭的に恵まれない状態で、社会に強い不満を持っています。

その上、幼い頃から抗日ドラマなどを見ているので、中にはそれを信じている人もいます。日本人と接触したことがない若者の中には、日本が関連する話題ならば何であれ、頭に血が上りやすい、爆薬に火がつきやすいといえます。愛国といえば無罪だと幼い頃から教わってきたわけですから、それを逆手に取っているんです。日本は何の恨みも持っていないくでも、デモをすることでストレス発散してやろう、憂さ晴らしてやろうと思っている人々もいるのです」

日本についての知識があまりない人々の中には、反日デモの際、「もしかしたら、日本が攻撃してくるのではないか？」

と本気で心配する声もかなりありました。

しかし、今回の反日デモではわずかですが、光明もありました。デモに反対の声を挙げた若者が少なからずいたということです。「理性愛国」というプラカードを掲げて、冷静になるように呼びかけたのです。彼らはプラカードを掲げるだけでなく、微博（中国版ツイッター）などSNSを使って呼びかけをしました。

こうした動きはこれまであまりなかったことです。残念ながら、そうした声は階層化が進む若者の間で、必ずしもデモをする若者には情報が届かなかつた面がありますが、暴力に訴えても何にもならないのだ、と考える若者が増えてきたことは中国の未来を考える上で大きな前進といえるでしょう。

取材した中国人の多くが領土問題をどう解決すべきか？との間に「すぐには解决できない問題」と言葉を濁しました。もちろん「共同開発すべき」や「鎮静化を図り、お互いに少し距離を置くべきだ」との声はありましたが、両国政府ともに画期的な解決策はいまだに見いだせないのが現状です。

ここまで述べてきましたように、中国の「80后」や「90后」のエリートの若者たちは冷静で、自分の意見をきちんと持つ

ているという印象を受けました。日本の報道などを見て感じるのは、最も危険なのは極端な二元論ではないかということです。「日本が好き」「日本が嫌い」や、「中国が好き」「中国が嫌い」という単純な思考では割り切れない多様な考え方があるということです。そして、マスコミで報道されるステレオタイプの情報を鵜呑みにすることこそ危険であると、私は一連の取材を通じて痛感しました。先入観で相手の国を見ていては、生の声はなかなか伝わってきません。

昨年8月、言論NPOが発表した日中共同調査の調査結果によると、中国人で日本に渡航経験がある人はわずかに2・

講師略歴（なかじま　けい）

1967年 山梨県生まれ

1990年 拓殖大学中国語学科卒業

在学中に北京大学に留学

1990年 日刊工業新聞社入社

1994年 同社退社、香港中文大学に留学

1996年 留学を終え、フリージャーナリストとして独立

著書『中国人エリートは日本人をこう見る』『中國人の誤解　日本人の誤解』『ポジヤギ　韓国の包む文化』ほか

人に来日の機会が与えられれば、ありのままの日本の真の姿を知つてもらえるよい機会になる、と私は思っています。

日中の政治関係は今後もまだ緊張状態が続くでしょう。関係改善の見通しは立ていませんが、国家間の関係が悪いからといって、民間交流も滞るということはありません。このような状態だからこそ、個人対個人のつき合いがますます重視されていくと思います。国家を形作っているのは1人ひとりの人間。その人間同士がお互いの素顔に触れ、理解し合うことこそ、国家間の関係により影響を与えるものだと思います。

（5月16日・アジア研究懇話会）